

おんだりく◎1964年生まれ。小説家。1992年「六番目の小夜子」でデビュー。「本陣組曲」「夜のピクニック」など、映像化作品も多い。最新作であり40冊目の著書『猫と針』（2月新澤社刊）は、2007年の夏に演劇集団キャラメルボックスのために書き下ろした初戯曲。



© 渡部孝弘

〔演出〕庵川幸雄 〔作〕W・シェイクスピア 〔翻訳〕松岡和子  
 〔出演〕平幹二朗／内山理名 とよた真帆 銀粉蝶／池内博之 高橋洋 洲野俊太 山崎一／吉田鋼太郎 瑳川哲朗ほか  
 1月19日（土）2月5日（火）全18公演

彩の国シェイクスピア・シリーズ第19弾 『リア王』 1月30日公演より

## 恩田 陸

やっぱり頭金だけではダメなのである。しよせん自分で稼いだ金ではないから、頭を下げる時は大げさに感謝してみせるが、あとは綺麗さっぱり人の金で得たものだと忘れる。私たちの素敵なマンションには、もう私たちの素敵な生活が出来上がっているの。お父さん、ひとつしかない来客用の部屋に居座られても困ります。リアは、長女と次女のところに最初から二世帯住宅を造っておくべきであった。どちらにも使用人常駐で、その管理費用が誰から出ているのかはつきりさせておかなければならない。生前贈与もただけでない。存命中には決して名義を書き換えてはならぬ。城が歴史的建造物なら、財団法人にして、維持管理費は基金から出し、簡単に売却なんかされないようにする。

そこで考えるのは、コーデリアのことである。彼女は薄々嫌な予感かしていたのではないか。まだ三姉妹の末っ子でペットとして寵愛を受けているうちはよかった。しかし、このままではいくら財産付きといえど、父は自分の世話になるつもりだ。どうする？ まだうら若き乙女なのに、あんなガタイのいい強烈な親父とひとつ屋根でずーっと一緒。私の青春はどうなるの？ それが、あの冒頭のにもない発言に繋がるのである。彼女はあの一言に賭けていた。あの台詞の起こす波紋を、じっと観察していた。このごろ父は変だと思っていたが、案の定激怒、忠臣ケントにさえもこの仕打ち。あの瞬間、彼女は父を見限ったのだ。もしかすると、フランス王と打ち合わせができていたのかもしれない。姉二人の計算高く薄情な性格も先刻承知、早晚父を放り出す。しかも大番頭ケントが去れば、国はガタガタ、内乱必須。そこで放逐された老王を救いに行けば、最後には必ず国が手に入るとフランス王を説得していたのである。彼女の計算は完璧だった。しかし、やはり世間知らずのお嬢様、庶子の恨みまでは計算外であった。まさか自分が殺されてしまうとは予想もしていなかっただろう。かくて親も子も死に絶え、不毛のうちに幕は下りる。

子に美田を残さず。昔の人はうまいことをいう。もちろん、シェイクスピアも。かくて、少子高齢化のニッポンの現代の物語として、『リア王』は我々の前に姿を現す。